



TITLE:

# A Multivariate Analogue of the One-Sided Testについての一注意 (多次元統計解析の数理的研究)

AUTHOR(S):

工藤, 昭夫; 笹渕, 祥一

---

CITATION:

工藤, 昭夫 ...[et al]. A Multivariate Analogue of the One-Sided Testについての一注意 (多次元統計解析の数理的研究). 数理解析研究所講究録 1979, 345: 61-63

ISSUE DATE:

1979-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104321>

RIGHT:

# A multivariate analogue of the one-sided test についての一注意

九大 理 工藤昭夫  
笹判祥一

$Y = (Y_1, \dots, Y_p)'$  は、平均  $\theta = (\theta_1, \dots, \theta_p)'$ 、分散行列  $\sigma^2 I_p$  の  $p$  次元正規分布に従う確率ベクトル、 $A = (a_1, \dots, a_k)'$  を  $k \times p$  既知行列として、次の検定問題を考える。

$\begin{cases} \text{帰無仮説 } H: a_i' \theta = 0, i=1, \dots, k \\ \text{対立仮説 } K: a_i' \theta \geq 0, i=1, \dots, k \text{ 少なくとも一つ真。} \end{cases}$

$\sigma^2$  が既知の場合については、工藤が Biometrika (1963) 九大紀要 (1975) で発表した。 $\sigma^2$  が未知で、 $\sigma^2$  の推定量  $\hat{\sigma}^2$  ( $\hat{\sigma}^2$  は  $Y$  と独立で、 $m \hat{\sigma}^2 / \sigma^2$  は  $\chi_m^2$  分布に従う) が存在する場合の笹判の結果 (1978 年 4 月 日本数学会) は Shorack, A.M.S. (1967) の拡張である。

ここでは、 $\sigma^2$  が未知で、前記のような  $\hat{\sigma}^2$  が存在しない場合と考える。以後、 $k \geq p$  で、 $a_1, \dots, a_k$  の中のどの  $p$  個の組も 1 次独立であるとする。(  $k < p$  の場合は、 $k=p$  の場合に帰着される。 )

$a_i' \theta \geq 0$  ( $i=1, \dots, k$ ) なる条件下で  $\|Y - \theta\|^2$  を最小にする  $\theta$  を  $\hat{Y}$  と書くと、尤度比検定の統計量は  $\bar{E}^2 = \|\hat{Y}\|^2 / \|Y\|^2$  で、棄却域は  $\bar{E}^2 \geq c$  ( $0 \leq c \leq 1$ ) で与えられる。

$H$  の下での  $\bar{E}^2$  の分布は次で与えられる。

$$P_x\{\bar{E}^2 \geq c\} \quad (0 < c < 1)$$

$$= \sum_{\substack{\phi \neq M \neq K \\ \mathcal{J}_M \neq \phi}} P(\Lambda_M^+) P(\Lambda_{K-M;M}) P_x\{B_{\frac{k-M}{2}, \frac{n(M)}{2}} \geq c\} \\ + P_x\{a_i' Y > 0, i=1, \dots, k\}$$

$$P_x\{\bar{E}^2 = 1\} = P_x\{a_i' Y > 0, i=1, \dots, k\} = P(\Lambda_K)$$

$$P_x\{\bar{E}^2 = 0\} = P_x\{\hat{Y} = 0\} = 1 - \sum P(\Lambda_M^+) P(\Lambda_{K-M;M})$$

ここで、 $M$  は  $K = \{1, \dots, k\}$  の部分集合、 $\Lambda_M$  は  $a_i' Y; i \in M$  の分散行列、 $\Lambda_{K-M;M}$  は  $a_i' Y; i \in M$  を固定した時の  $a_j' Y; j \in K-M$  の条件付分散行列、 $\mathcal{J}_M = \{y; a_i' y = 0, i \in M, a_j' y > 0, j \in K-M\}$

$P(\Sigma)$  は  $N(0, \Sigma)$  に従う確率ベクトルが正象限に入る確率。

$P_x\{a_i' Y > 0, i=1, \dots, k\} < \alpha$  の場合には、有意水準の検定が可能である。次の例は検定可能な場合である。

例1  $H_1: \theta_1 = \dots = \theta_p = 0, H_1 \cup K_1: \theta_1 \geq 0, \dots, \theta_p \geq 0$

$$P_x\{Y_1 > 0, \dots, Y_p > 0\} = \frac{1}{2^p} < 0.05, \text{ if } p \geq 5$$

例2  $H_2: \theta_1 = \dots = \theta_p, H_2 \cup K: \theta_1 \leq \dots \leq \theta_p$

$$P_x\{Y_1 < \dots < Y_p\} = \frac{1}{p!} < 0.05 \text{ if } p \geq 4$$

例3  $H_3: \theta_1 = \theta_2 = \theta_3 = 0, H_3 \cup K_3: \theta_1 \geq 0, \theta_2 \geq 0, \theta_3 \geq \theta_1 + \theta_2$

$$P_x\{Y_1 > 0, Y_2 > 0, Y_3 > Y_1 + Y_2\} = 0.027$$

例1 では

$$\bar{E}^2 = \sum_{\substack{i=1 \\ Y_i > 0}}^P Y_i^2 / \sum_{i=1}^P Y_i^2$$

である。

例2 では

$$\bar{E}^2 = \sum_{i=1}^P (\hat{Y}_i - \bar{Y})^2 / \sum_{i=1}^P (Y_i - \bar{Y})^2$$

ただし  $\bar{Y} = \sum_{i=1}^P Y_i / P$ ,  $(\hat{Y}_1, \dots, \hat{Y}_P)$  は Pool Adjacent Violators の Algorithm により計算される  $(\theta_1, \dots, \theta_P)$  の最尤推定値である。例2の数値例を示す。

$(Y_1, Y_2, Y_3, Y_4, Y_5)$	$(\hat{Y}_1, \hat{Y}_2, \hat{Y}_3, \hat{Y}_4, \hat{Y}_5)$	$\bar{E}^2$	P値
(1, 2, 3, 4, 5)	(1, 2, 3, 4, 5)	1	0.00833
(1, 2, 3.6, 3.4, 5)	(1, 2, 3.5, 3.5, 5)	0.9976	0.01397
(1, 2, 3.7, 3.3, 5)	(1, 2, 3.5, 3.5, 5)	0.9916	0.02063

## 参考文献

R. E. Barlow, D. J. Bartholomew, J. M. Bremner and H. D. Brunk (1972) : Statistical Inference under Order Restrictions. The Theory and Application of Isotonic Regression. John Wiley & Sons.